一休諸国物語図絵　二

へ波 13
603
2

一休諸国物語図会巻之二

○

一休旦那居士二人同道して東山辺へ遊山に出られけるに。ときしも春の中ばにて。梢の花さかりにて。いとおもしろかりけるに。遊山多くしける所に又六人うちより。手をひきあひ。うかれうたひ大踊ひしく。かれこれ行きの車のおもしろかりけれど。きくにたえ底をひらきておもしろがる。旦那の内一人のいやう。あまり酒をのみてこそ。何ぞそれほど底がおもしろかるべし。一休やきらいはやおもしろきことまでもありなり。よく〳〵替りておもしろき事なれども。諷もおもしろのたるべや。おもしろおもしろのあそびやとうふれども。梅さくらの人へおもしろきも太鼓とやらくさ

○

一休和尚いまだ十二三歳のころ。師匠粘つがを下稿く。など一人ある小僧に。いつくらも吟味せずして。海をとうくも

らべしぞ。めし路をゑどもむらくうず。忽ち死る毒なりとい
ひ。ひとりの我ぞらり合ひくれねバ。夢ごろ一休わうめてくいましを
毒にとせよ。残らも師の出しまごうぞくうを庵しと思ひく
侍りる家ぶ。おんし。師通用ありく出しれく。一休やがく
さし出し。柳より丸おろして向ふ。打さぐしあとまへと
その相をと付る。目能くひんしとおのひろましふ。先
二三ぞいらひ。ぞうあまりさく。師通のひぞうせらて毒を
くらおしまがんふかせすく。すう處へ師かへておくふ。一休
来ることなりく。師行年ぞく聞るくされど。お寺の
かめ隠を打まりるなり。定めくれくみすのきられゆと
まづしとおもひ命つきをとしなし。我もがへるを
御きらねどふ一壺る人はねども死なず。辞く壺るきぞ
つまとと残のまでを。いうまさときとのつとを付く死んと
そんしねどもすくあるれはたずとのまんする。師の縁も

念乃いなくありくらわしひてぞ入りまる
扨備後の次をわくまし中さり一寸の虫ふみのかすしいとやさ年
の比、狩の庵の遊廻とぬむとのる。殺しく諸羅地獄の中ふ落
ち、鶏をころし、那と煮焼けるのハ、屎の地獄ふ志づむ。獲湯
獄中ふ落く、豆とうり乞く。岸数おにくわろくわすふ熱湯
のよふ入ふし。其のふ尖んと乃せ、石の中より極大の人めぐく
甲くしく熱きもひくるる人ぞくし。妙まき利せるん
罰果より。けがを清くさく落着肉もとこんとはし。九血と
ふるき氣とろうとの心ぞの日わきざさのわくつさとを。
きく死とおそく年と志つく人の足ぞとそきて。必朋もちや
いとおそやめ。登のやうきるちいさき中ぞと。人よとまじくとび
まりくひとなども。亡ふ舟はきるを。うち落せし、志んぞ乱しく
手足をとらぬけるべる所ゑも。命をお年ふする田をあり大庵の
支持とりの實くんする人。貞純年中のむしめつさ。そうと
とやさく、あくき。殺信してわくましが。此人り得とし。誓将の
すきまで。ひさと大をたやしく。四又十の縁の紐をかくまうしか。
そごくて。ちりけり。立つやうに。ならり。大將つし。
刻損かしてくるや。西藩もなくうかなやくは医師も唯ぞ命ふ
ある秋人来づよりくのち。使ざりりと来て。大め足きうう
て。とくまる所が命をとしでん。おうねとみ餅つきもかるとき

此人おもひ過ちて。物をきせられけるハ通達が神なり。我ハいろいろと手を
つくしたれど。犬の日通達もそのまゝ露見して。家の人此仕業と
まよはず。我なるはその後の食を盗まず。つねの如く吠ひて
命をつなぐ。その母やうやく年よりて。此頃さつまの
もの来りて。かの後生を吊らんとて。母の犬ハ食をうし
なひ。一つの白犬来りて日。我すでにつねうきよの我肉を割もらひ
のかなしさ。まだ死もさとらざるに。母まつ行すまゝに
ことさらの恩愛に拝ふその事をいまだ報ぜずして死
の犬あるにひとしく。此人の食をうけしことと。我にかへりて命の
果なしとおもひて。其音おどろきて。すなはちものの
畜類なりけるやと。理をはくしく。いつまでもやすらげけるとおもへば
まことにこころざしまでも。猶しもとくことぐくに行はれて。まことに
のごとく犬の心も遠離なくして。此よりしも子息も
事もありしより。業をかしこまりけり。宿を定め。手をとりし事
信義うすしといへども。いかんや。禽獣の大志をつくして。おはしましぬ
ざらんや。家をかゝる禽獣どもにしれけるぞ。小にすむ魚
ゑを。つゐにもひのちを思ふに切なる事ハ。事をとりて禽獣とも
魚を鳥をけくこの人さへ。ある後のやうなる物にて。深くしてそ
氣をさへ母なりし子の肉中にあひたりて。我死る
までハつゞきて行く事とつゞきなく。後世のごとくなる者を
とぶらひ鳴もの。すなはち身にして侍る事しかなし。ことに哀なり

のことをおもひ。その身ハ死ぬるとも。ことにまことのこゝろざしあるかなしきよと
うけなから。己が子と己の下にしたがひし。つひに死しては妻をも
まよひ。鬼火となりて。ふたゝび此世の人となり。獣さへ畜生ハ人
まさりけり

○

あるとき白河辺に住る京門に名聞なきかかはりの人あり
かのかげ一休のもとへ。なかなかの事ときゝ。かよひていつぞやかいて
難句をしうけんとて。常にくんげいしきりなるが。或年
ありのひ宿にて願ひありて。まづ何卒さしひかへるあいだ。此鉢
人きかなり。扨一句してみんとくちぐちと白河辺より
此所に来てぞいそぎたる。折ふし一休も座にましまして
此句へとなり。しろくすなはちに閉しくもし。一句の句
作も出来ざりければ。嗽を以て。ねぎらはれ、かなはぬけいの句し
かかはりと。何もそとし一句の縫せし。なほもとを詠てみんと申
されたれば。一休傳へければ。此発句に汝の服を払ひ。まつせてこれ
まく此句にのきせしとありしが。問しらくて遅し。事なりけるを

さらばやまひつゐんしてなんぢをころさんと思ひしが。此家は絶

とて失ぬ。一休むらさき野にうつりて

紫野丹波道

ともうきたれば。いまだ鳥も引入ることやすきことなるが

そこらはいづくの人ぞ白川のほとりとこたへけるに

白川黒谷辺

とあるくらしけるに。かの侍妻をつれてさしもいとしき妻

がなりける。のうちに納言の息女二条の木の名づけるひ

やうさんの川なかれたる。かゝはもせかいおぶくろうくし

かたぐしと思ひしに。見えける海士なるとて鳥もつきあへて

付くらまよひかゝる名対ゐる。よるなるや。うしろをたどりて

ふりく成とりしけるとなり

○文遣の土佐守よし御挽物の画を一ぶくたのみける人

ありしが。縫まうさせてはらいけるに。縫人なくて土佐

守が家へいたりやくまでおちふし。土佐守は殿よりあまり知らず。

ひそかにしたしき絵師の絵に仕て。いとしくかゝる中

なり。何とくたのまれし事なまでに引つゞき給ふかくされけるに。

土佐守絵を書すべし。一夜絵ずしてみるところ。悦びすはねて

うさくまおもいもつて書せず。あまりなる又幅とつくる

けり。川の図をかく。うつらうつらゆるも見えず。世かなり。ひきりまし

いつまでながら筆をとりぐるしくとまどはしけれども

よりさわしきとる。あまつてくるのを筆をもつてふせりなる。のぞくところ見れば

その画をとりて見るところのふかくしてよろしくいふまゝに

さらに何もあるまじと。水をすゝて見るに一筆ぐるぐると

まつるとのありさまふつくらかくあまり金泥ぬりぞされ

でも土佐守の人おもり何なるそし。何でも我あると見えず

とらふ。かゝる画をりゆく何とせんと引破らんとおもひけれども。

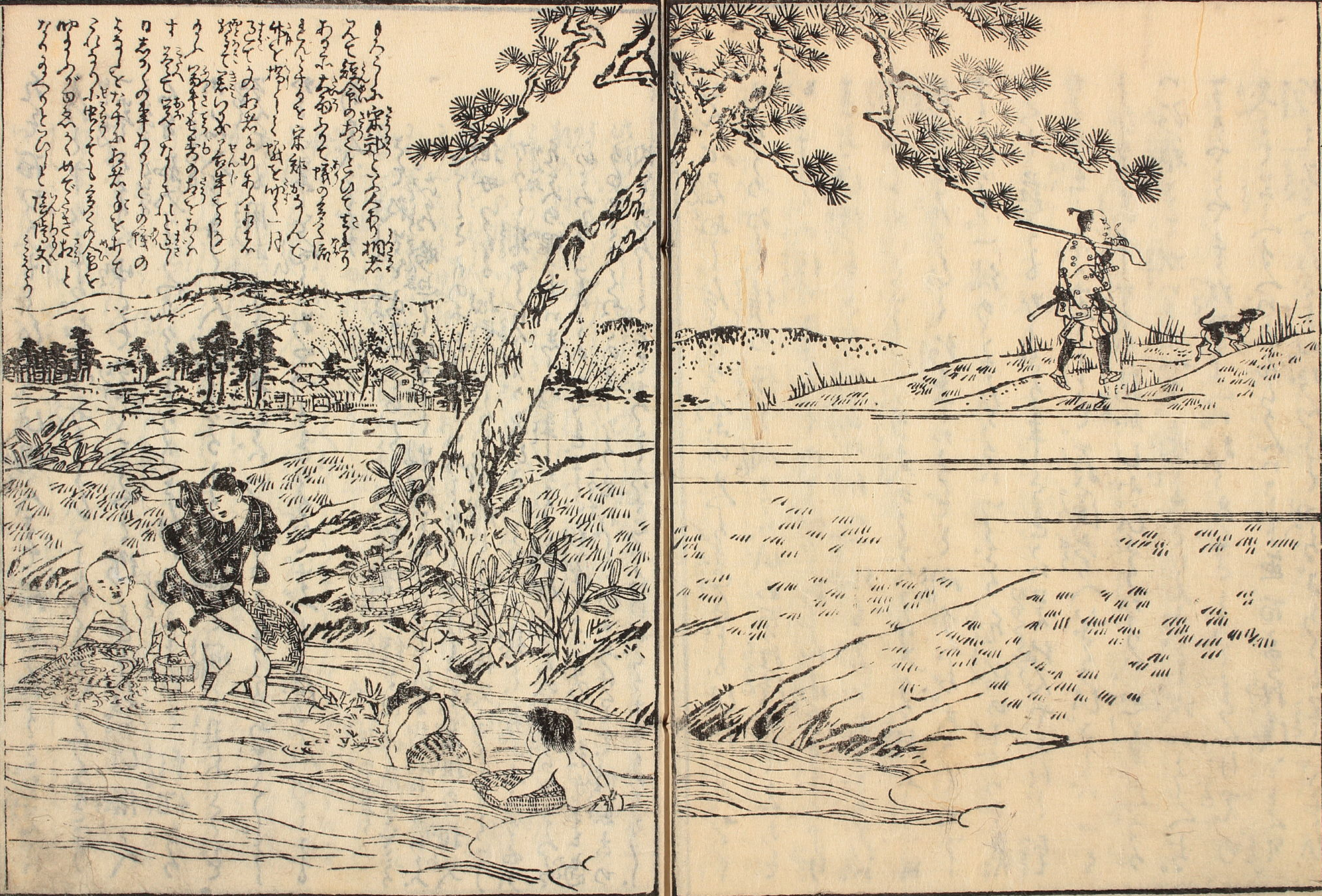
三国一の名人やらんや。まんじとおもひなるが。いやく

一休和尚に讃をこひし掛物とおもんずるぞと。いそぎ大
徳寺へもて参り和尚に申ければ。此画は古法眼が書し
んが。さるに此家中の者まうすは。いかで御覧あるとや申し
けるまでされど何ともいらへなし。讃がのぞみならばいかにして
まゐらせんと作りまゐらせ。おもしろき讃とて。一休
書もとより

羅漢中に和尚あり。その一幅をとくとみいだし画工も
まうさず。持つしもまうさず。讃する我もまうさず
と記しくまいらせとみる人きく人毎にさてもまつすぐ
なるほどぞかし。まことに一天の掛物なるべしといひ
しが。その比おほくのうけとり人の手にありしが
興寺にて五百羅漢と作りて常住の宝とし今に生終まで
家の名物にて弁当や書年の後らかんの
まつり香花などおりおりにあびせる世俗ぞかし。羅

かんを見物しけるが。余の人は思ひけども。此仁一人つくづく
となかめゐて。絵の像を問ければ。此は五百羅漢にて名あるて
わらすらん。何像へさぞかくめでたくおはしまして。みりさしと申け
まとむ。絵の像をとて五百のおのおの一仏も名をしるされず
何をとめいひすごす方丈のうへつけ入る。わふし一休
行合せ給ひて。何事なるぞと問ければ。まうくのよう
申されける。一休のこたへひとつには。いつも凡俗のとがめぞや。
かくも芸なきなりける事。かまへて見給んや。されど畢竟
なしがたくいへずとて羅漢堂へいざなひ。ざうは一々
とひのべ其中なる釈迦もふ。ひとつなるは迦葉。たれか
へ阿難。さて次へとくぞ。南なさなんど。其次いとくべき
まさやとや。其次へとくれ。おもちろきと。てまんけ咒ども。
文をそ五百すべて御らんは其座。百の羅漢をとくぞ。
何ぞ名へすべきぞん。だんだん問わず。さくして其人へいらひ

もろこしに宋朝といふあり相去
んて經合のおくよりて音まうり
あまふ翁ありて嘆のあまく居
まんじ于今を宋朝からんて
仲を携へく嶋をゆく一日
ろとて毎のお君よりおんおまん
親父て畏らるか年もろし
のふ箕年もおろのあそておるへ
すゑて聟へなりてしとるて
日志ろくの年あらしとの慳の
ようとなす于ふお君あとよみて
くなうふ忠もそも多くの人倉と
仰すうが田の気えうくめでくさねと
なくのうへつとひとと陰陽文て



これぞ石づりもとひしが。此俗人こそ和尚のよきさいはひんし
かれとやくしまた。和尚おぼしひさしもなくば。いかにけるさきかり
一心ぞだりは中をそ覚へてたて御まさくれば。此俗人
仏に知入て。かの身となりされば峠をよりて殺化ける
めん入てきく人数しかとかや。物ども聞て用ふさくど
さんても用ふかぬ事とはつまらのこまきるのそてこう
なき事を向くおやつゝきたるぞ。すべて随分のくるしま
あらんべからず

さて殺生を止めざるのところあり。摺が経に曰。仏祖生をころ
さぐるん輪廻し。おなじく生死にあひくるがひ。おはなはだ
悲しきのみならず。いつもかはしと六道をめぐる。先祖の祖父
祖母いかなる報業にうつりてか。畜類とうまれ。御父坊がくるしみ
なりくる其母か。兄弟が身ひさつ。うまれつく来るく。或はまたらんも守。
兄弟人の眼にかはしぬ事なり。生を殺すの肉食をよんでみ
ひとつもこれまたつかふ。まさに不浄なるものと。殺生をも面
多く思ひくるしみこの事なり。必おしそひよろけるく。袈裟恩志の
肉をもふくしく志そ申つけてしておしゑの御はからひまいりのぞかし。

此品をもつよむ事をもつて。殺今の経文のごとく仏前にてよみ志の
まことはしに生をかけたるの志をもてあそひきとこそ。とは彼の
殺の付て西仏とよくそつてみ人はそれ西仏の子を殺して。身を
うまやかふきりくるまま芳くかくのしふ。西仏西にすみなんをとなりて
つゞるの肉とつくるを志ずにひとかふ。仏ざるの知るく。鹿の
西仏とおし人まりふ我子を召して志かざるの事と。くらうし男達
まんなりと。史記の文をおのぶをとめ貪点すべし。此西仏は弟子人
そも志のも子をもつて肉をさく志ていさとるのこ志ろぞ。猟人
愚猪の元更まれ多く人のたれ肉をいも生とう人くらをのかれ
正直の母猿が生きて苦しくてもいふきへても志すく。その猿終をとこと
給ふくまずれかくの人おのれらの事をうけるそれをもとを山の
ふ紺を和くる人もあり。紀の人の親うらくるの猪の犬
ふとしくらそをしなば。かる双紙をもちいての御経をのここと
ありましの書などを引くやさしかれと一日や二日かはかつくるか
をば仏山をかなりかなりけりさせば。向後常仕まやうしんと
なくゆるよ。鬼形をもつてかかるありとめでてさんがさうそれ
うしがきさ経文のおもしろく中の事や。其の身はりわくまつ
はあんでもつかなし。此方の殺生つれなくする。すなはち因縁いのかれ
かならず思ひとりよくゆはね綱をとり殺をよくわたるさとのを殺し
まへはばかくかをつとつけらちとよく念点しく。なる事うつくべし。うれ
いまゝしてもひとまもとろふがゆえ。志し出家させるの法

利をもとめんと入けるに、つらなりてひらけあるも有。ぼんぞくの中
悪俗も去ずして悪しく畜生のうちに生るゝなり。おの〳〵大義と
いふ。又いはく、眼の色くるはしく二百六十を中にかしらの風雲、紅もの
くるゐの二百六十。中をきくらんと司るのあり。又
二百六十。経がつらなるをなす。甲のあるとの二百六十。四足の司。深
なりとその二百六十。人民が…なり。又あるは二千畜生に月を
見ても、絹のうへ二種あり。魚鳥獣なり。兎一尺の毛あり。魚にも
六千四百ありて、鳥に四百あり。獣に二千四百種あり。従二…
合せて八種、殺不可といふ。蟲も亦八千種あり。一…
天のある其八千種、虫の虫、諸の法をとく。横に二百六十万里のり
羽をもつて飛とさゝれ、寒天の気の…を出。鷲雞鴕鳥を八億に
山をもつ事七めぐり、魔羅大魚あり、長サ二百由旬七百由旬
荘子に云く、鯤と云魚なりといふものは、登坂鳳人の翼も
の中に住む。八方の戸を出て、を知るは山に住、川に住、海に住、里
に住、野に住、空に住む。かゝる小虫を始として、これなし、又いはくと
らくし。又なめくじも猫の扉にもとも扉まで、…人もよろこぶ
経ふとものと弱きを伏しまでうらみもそのなれども、
貴ぶのあまりにくらべ、つさあひさし、おひかみあひし、
くるまをくるゝ。若しうちくるゝ、我瀬をり死わくるの
生まるとうら、若経をとらゆるのも、何ぞ現世に生るの
業因あるまじき現生の悪心より悪事をまねき、又業の

ゆるさとよくふかく、すなはち悪心をおこすべし、人畜
くらし。物の気をとらまし。物との気をこれつかそなりとも未来
とらすべし。虚実をいんぐとりやて、善悪この気は
けめるうの大事をのかれずして、ひとつ、まかせ力を経力をとのこ
ともまりつゝ、一念小言ひとつに因果の大悪大燃のそばのあり
するうちてもやもやく、往劫をあひだ、さきは、あやまつも
と又ももの三途にくるしむ、何劫の苦のあとは年なれば、人民の苦輪
受定が大年の外にのみなす。ときつる、又殺生まもらしく、鉄輪
地獄の焦熱にてくるし、悲しき年をかけなし、何の死の苦しみ
やくの牛馬大根のと生まゝ年あまりあるまじ。まづ讃歎は
こまつそとあまらり

○

さるなまさりびくる男。一休の弟子、雀を一羽つかませ、いうる
御傍らのすゞめを生か死かといん。和尚むとさへうちまわり。
ひとのいきまもこさずさりけり。たのしまんに生るゝとくて殺すこ
ぞ。又殺すとくて殺ちやむとの年が去ず。一休此の後
うまが死人にとりつひくまいの口の声さわぐとゆうけぞ。
ふるまもくしまぎといろときさ。さる出になまくいに。一休は

と出るうとしてまゐりて。高きなかの道ぞものぞす
くじをとりく知りしとなり

○又或とき一休かの川をわたりけるに。ゆかりのなきびん人
川中にて倒れ流れさりけるを。拾ひて川のそばの人
多くいつまり居て。之を引上げとりて此ひとり
あげんとなさけのものもなかりしかば。一所ぞの流れとゞまひ
川端にかゝり。やうやうとしてあがりけるが。人ぞよりそひとお。
さて此一休へ望みをかけし人れ。かのしきものと名やうとく
なりしかば。一休是をみて。さぞ銭川へもまうけれども
しれぬ。あかからうよりいかれども生れとせぞ拾ひし者来るへ
あらうるとやきたるか。人は常々よくいふちさ

○或山里に或ものの男はひとりかといひ
揺とられとどもまひく打ちたり
信ありくちさりかうかり或秋のむかしふいつの

ろまで絹ハ志のびなんや。いつもとしてもつとも殺しく
ものまろふ拙りなんやと。互ふうらうけく法合しかく
出しく或夜罪ふ酒と志ひく。其ひ所きしめ。夜ふけ人
志づまりく後まで出して詞人しく。それの頭ら打けど
らちくころしさて家ふ火をつけ。焼死うち御ふし。
うちかふ人もなさきやうなのなし。去るつもの内とり
つき殺をこそふあさきけびくり。折ふし一体通り合せ
け女のなき起とゆうき。其色作のおのひとなしそして。
いたらちさ人ふうがめるの志かくとかろ。和尚きく
かひく。け女のうつき契ろ。おそまじくうちりうかふ
かりしの契まいつくず。うつきなりとひく色うのよ。
おことそ今の修行じゃ。人のあつとハあつまじ。もつとよう
いまふいくるまでけんどん放逸の様殺つうち。弘法大師の
きくりまつて云つくべつ。寛ちく大師とあなりとおわらん

くり。返ぐりきこしく。それをぞかうしうつら。其代りうつぎの頓宗僧かれとて見るかくれんどなりしかあり世に一休和尚とて天下の活僧なりしとて。備前ともおもひける。つくろひたるなきに。如是の上人も先もあとかたすて。いつ年なし。ゆかりさ黒谷へ出られあり。寺中の人を一休とかまらの中なるが。それを世に活仏と人びとかたりこの禅師なりとて行きにかりまうでける。ぞかや当寺に伝ふる善導法然の画像に賛を乞ものとや。かの念仏無宗とぞ云ぐなる。日蓮宗にて甚く禅宗の仏心宗ぞくりかかる方の祖師には実さふとて宗論をせしや。かくさ候ふばかり讃しめてしかやなまでに。とのく辞退あるべしとお侍しくやがて一休を方丈へ請じ件の画像をとり出し。賛を乞ひしかなに。案のごとく筆さまう事なかりとのむかし男。紺外に画像をひろげ出しくれぞさりとひとく。一

縁ありて筆をとり給ひ。先善導大師を賛しくいはく

末法出現善導　称名是弥陀化身也
濁世末代導愚人　一切衆生易往生

法然上人へはく

伝聞法然活如来　安座蓮華上品台
元入念仏無底宗　一枚起請最奇哉

と御時くはかきしるしたまひければさてぞ往とてわのくわさふよろこび給へし。時宗御浄土宗にしく。かく讃といふたり。歌の事なりとて画像なりとて又日蓮宗がいへるなりつきるに。かりうまつき筆をなげ打て。かの讃を日蓮宗にて見しなれば。あさましき歌を立て中なるを読みてちふ日蓮宗と浄土宗とは中あしくて犬のごとし。やく牛のつき合がごとく眼をいからしてみちたらで。日蓮宗かの讃を見て。ふさふにたちてと立一休をそしりけるとき。寺中に一人中なれりて。やがて一休の

にんげんのふかきりみなさい即ち如来なり。いざや了達人
聖人の像とかせ讃をうひくこん。いまからの證文ある
あつめしとや又まちむ尋ねつゞしとそ。そごさふさいさて画と
うせや〳〵和尚の居まいらあつく賛をとるのむよしやけ
まつ。ゑんようつるさい像のまお。やすくき来たのからしひ彼の
画とひらさい御像ぐ〳〵なかに此像なるそも如くつさくくらそ
黄なる衣をきせたりまた気ひさまへる。人々申たりけるさんは
いまもなかつうふたさふかく白くなくても実おる先ん国浄土宗
法然の讃とあまん仕る白衣にとてらりくとも上のもなれなをを
まぢらく手けふかくせく。まわりはいきさ讃しすぐしと申せども
んゝそうとて。先の法然の讃をあらしとあつしく

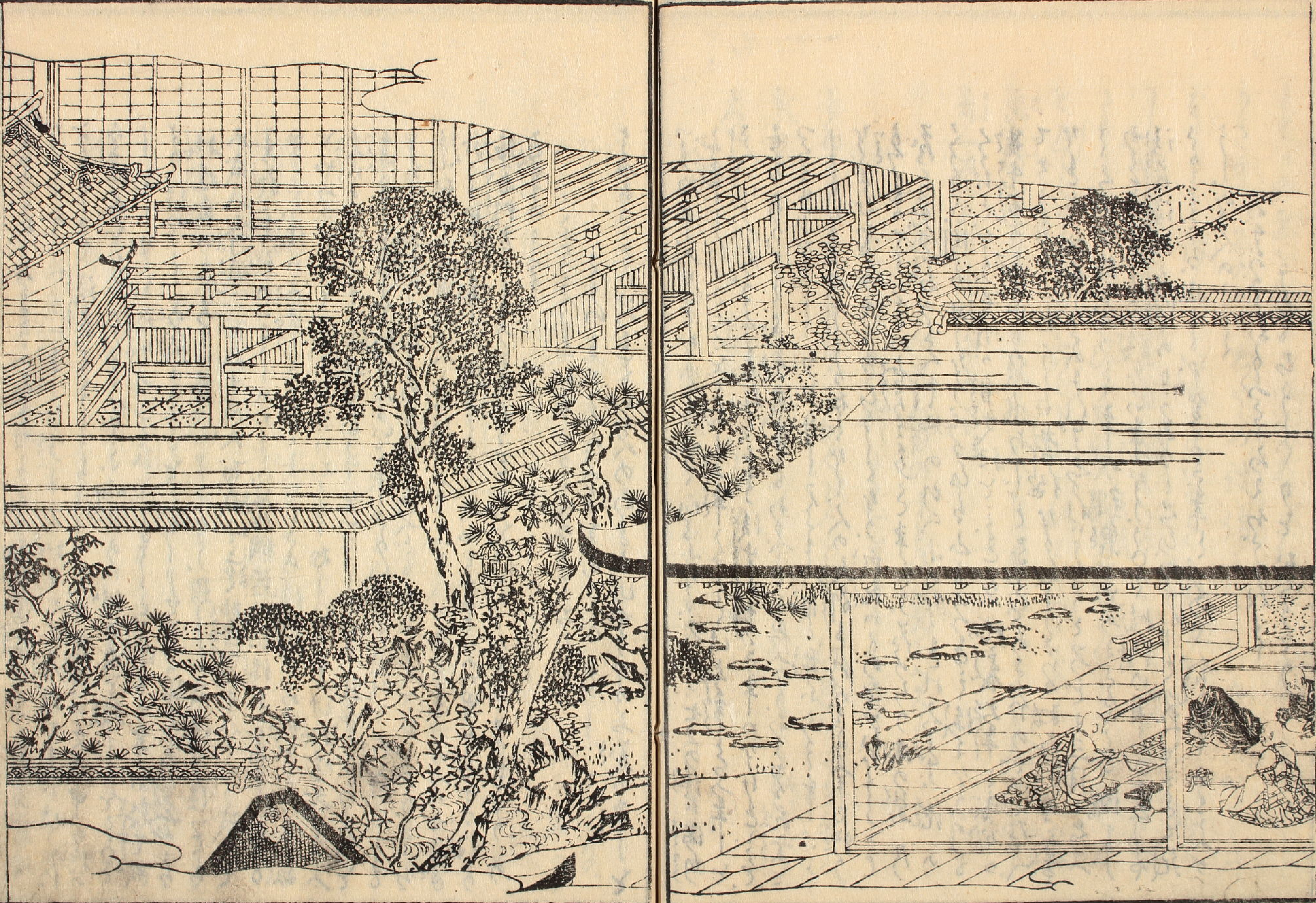
傳受国基活如来　雪庭刹光如法座
尼入道日恩陰紫　一遍凡聞瑞稽哉

となへ〳〵て畢ぬ

おなじく小坊主まゐの様にめしぼうず
とそうけたまはりとのや。其以来は念仏堂の住持
黒谷の讃乃よしときゝて。まさるのかたらなりと酒
山しく覚えしめし。かやうなる御像なるに。何ゆゑけ易く
を讃するものゝ申さんとて。まづ一山の人々を呼よせ談合
せられけるに。其中に一人申けるは。何とや申すとも。かるは
先宗の祖師なれば当寺に作る本堂色の名号
大師の霊像にて讃をたのまれよと申せり。各々申やう
げにも是る代々当寺の重宝なれば。これに勝し
誰和尚まじきとへ其分使僧にめりの人とそ彼の
本堂色の善導大師の霊像を持せ。一使へまかり
一体を対面して申けるは。黒谷の讃いよし承り。あまりに
うら山しくはひくかまで来りてなん。あるは此方の名号
まとも讃をわそつしらへと申なりける。そもしそ安き所用

とぞつの霊をひらくさ供養あり。さらなりし一筆さらしくと
うきすひ。えのめく志てめ。仏像をつくされ多まハ。かくしけ
なしとぞ探んくいてしき。いそぎ釈尊像をつゞ。志ての
しつのもしとなりまたる。ねもうさま仏像を本尊とげ
。まづ一山とよしひよせ讃嘆せらるやとて。やがて人
を出しくまでる。呑くよろこびたちて集る。さてこの
霊像を勿丈ようけ。ねむえんしくまでたい。うるも大文字に
示一ぞありまうさま
くわかうんなるものすなはち黄不動と
智證大師なとをうくる辞
とわそらしくまでる。ころ人どうとさくしひ真つとさまする人
もあり。出さうえなる人もありしが。それよりまで続くく
天下こ一幅乃名物となりけるとかや
称壇戒とのへ事と中さるしかさん。さても月日のうつるにまま君の

つもりぬ年。入日のしおり人よりゆくひつるふなる。又八ッ七ッの儲り備り
子事としひさ女のと。又かの実事なるとくけ子事とる事と
さへ。ひとくんぞよ子をもはれ。ふりの後生書えさま年ハなけきとを
世をおくりし。千年万年もあるべしと思ひしがあり男の悪業と
つもり年なりし。ゑきと針くつえすまく聞し耳にふる事一つとし
しくなりしくとまらわくなし。人の死別もいつれきの人まで御り
なくさむ男女。それもしひさしくなり。頓死いりのとゝむにはかにとも
又なくちりやらのそれは。世をあさま多き事なりいろのちり木の葉乃
花ちりおのさんや幻のりくふのなかまれをらず。濁世の
くるうく。淵にせはなり。このひとの山もくづれて海となり川も
くがとなり。色明か常さ変とまどつ。地震お年と幾度の
幾千万の物語ものつし。あらしもとでとおさがひのものさなくて
てたつるぐく。一ねとしてき常住なるねもなさらむ　ねおくこるさ事
なきお。我命もこのまいはず。志つれいつのとつと十三月になる
くらしとりかの此事の利鬼がせめきたるとくきて。織り
あそそくさぎて後世なる年なりける。地獄の有様きくや
後世も。ねかのひりあらしそひとえんしそ答へときて死
るかとさる。梅をも甲斐なき年と。つゐく合点しさまうが
よしある人のうく
おのおのとおりつこころきわざされく
くるもちうしく日をおくりけり



もつておもんみるに志まめなる人の邪・僞をこらしむるが為
なりとおもへるにや。一事を殺すも大切にて天理に違背するゆゑ
ども、されバ儀式をもうけられしにて、大悲経の文乃中の擒の
宗ふかんをみて、それより仏に帰依の人を教へみちびき
しりてみよ。我宗のむくひを申ましく、が其上の事に誓せ戒
よりはじめて、人の戒のすぐれたるをこのみの出家受戒して
我嫁娶の事あらんや。ゆかしき戒律にはそれ
五戒八斎戒二百五十戒又百八十戒十重四十八軽あまつさへなる
菩薩戒のいましめ、梵網経・律ふ
申しく、僧の常をまもるをおきめ。何故か五戒をりつく勧
とやめさせんをこころざせハおのづから行ふ先、婚姻といふ人
文字のわざにしまぬに嫁とおとすをつけしめらる。我妻をおかぬを
妻をもつの事を邪淫となとし申さるなんども、此戒を在家戒とも
申なり。出家するにいたりてものは男へども、出家にいたらうに
ことおのくの身れろへと思ひおこりて、つの事、妻と云ハ女の事
おつ男を妻といひ、男よりも我女を妻と云ハ男女通ずる縁より
指死判定ふ妻の身へ、おつ若文をはなれしるべし女の身よりの
色欲事のくるま

さるさるふあいさつくの事まつりも
こゝろあらなくあつまるかなるを　と
きみえしくるえ、又まもおがくへのおもてにけるなるふ儀の事一を

すでにおもむく今の代までつかさどりのほか行まなゐ
行ふも、けしきのふ議ぞ大坂より誹ふ経ふも紫てゐの
あまたあり。僧侶の私をさりすれば行まよひてなり。ねんぶつの
事を経文の邪婬の罪ふ流生をして地獄ざい畜生道におち
る人の中にまよひとる。二種の果報をうる。一つには帰貞良
なれども、二つにハ一の妻おもふてのがれざるべきと従ふ
そぢめの婦貞良なるすがた、其生れて人の女房とめすと云れ
よの。後生にもまさしく人とうまれて女房となりてたその
女ひとり又余の男に我身をしそうしむすとなる。そのうち思
ましるをとそく。又夫の男をおさへてとく、余の方ひくと
あやすやうなると婦貞良ならずしとつ儀ぞなり、こまてる我戒
世の志へるをあらそすとの一つは夫の妻をあらそつてハ、戒ひ
本妻の女りけを揃へて妾と本妻とをそのこ、ゆかりとらへて
どくがひなんどして、そねみくるひて、大きなる悩ひとなれ
ばちふ王の経その陀下におまて、夫が行ずれば又聖人の
まぞ。わかに女の事さえのこまかな嫁つかうひかず、ちかきある夫婦のと
てはうておのれ中なる中の数ぞのとるまふりけく嫁らぶりしきを
とわきまへる事ハくす事もわかさちらし。ほどりほどりの縁
我も方便もえりこず。とがもなさき縁をつるかり釜をなげ
わするか。嫉妬を家族へまねつて事なし。行つうも思くおのおのまん
きよう事かくうての後動これハゆやとをもかんにんもせまず。又

又それより座であつまりとおもへば。いつの間にやら。なぎさ藤へ三
ちらと一夜のうちには中直り。竹の節もなんの〳〵として、おかしや。竹の節の外へはそれさ
人のおつひ中直しのときは角もとれ、きつ相しく。竹の節ときしく、治まり
引人。小松すしおかい、さらく〳〵乎し人の様ぎ。竹の国の丈ぬ
を志らぬしらへ、いまもおのが松も心えしりのまそ竹の落がおもへば。面白く
しらひも。ころふまつる事しる年の内のひ口舌がおもへば
家織におこる〳〵。いかにも横の中〳〵、閉他のつぶせず持たず。松とも
さびしくも中君に絹きのおもふるずのさうと、いづれともおもつひ
おそわきざさ筆もそれまでおき〳〵、先は邪法戒とらふ
事ちて天下の此情ななまぐ有をとんずし、残りをさらんと五十
やその男は金もさん至ずの嫁入せぬ事じや一人さんこぶる
がそのままひのやむとらんとうしをかきん

○

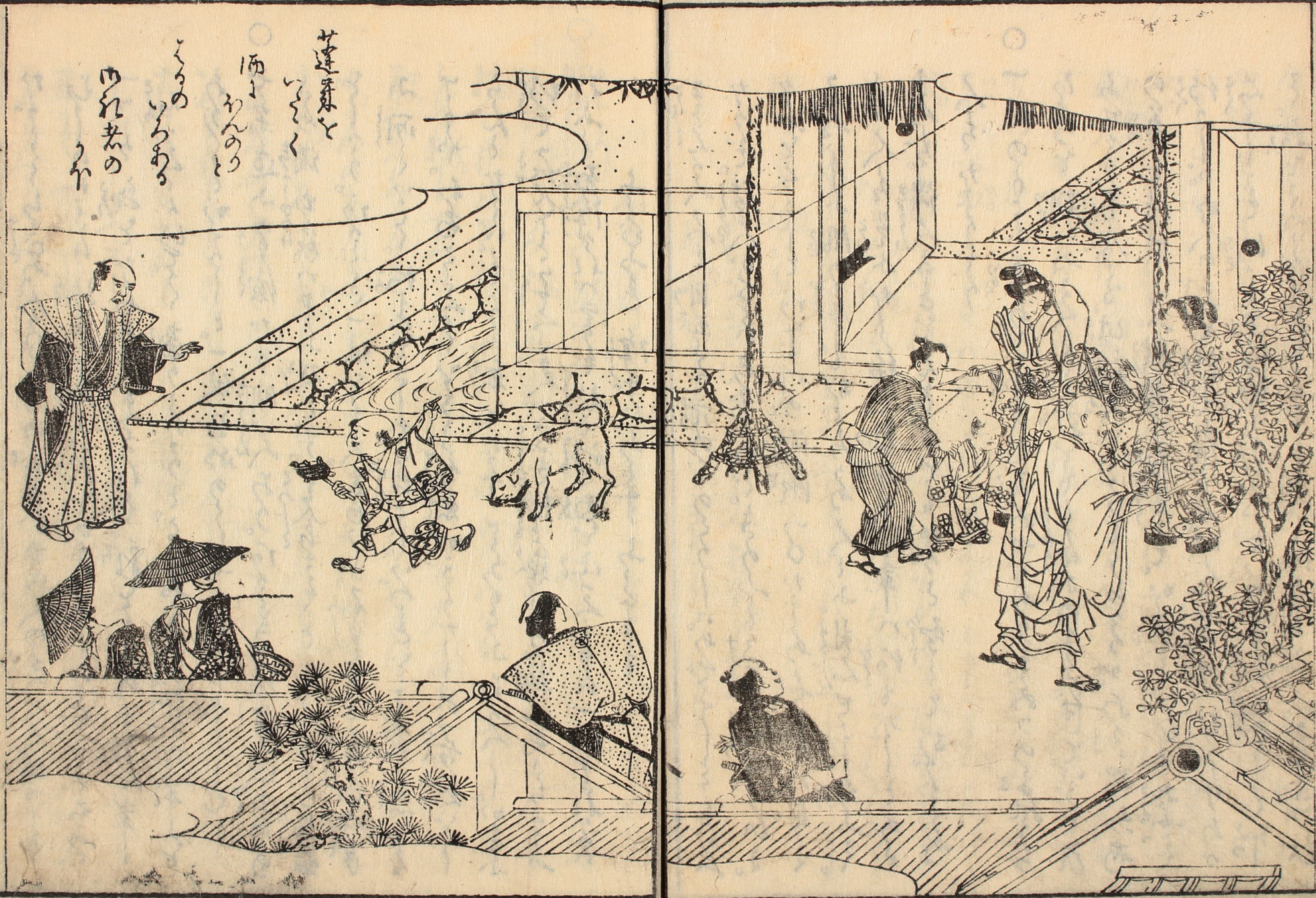
正月元日より三日の兄さんをひく業のその月のうへの日のそりて
なまる。一天四海の人々のかしこさも悪ろうも悲ある也も恐
きも。若きも年寄きも、そのひよろこびさるかなく、屠蘇白散をのみ
しぶかくなるとも鏡にうけ心根すくるそそ凡りちなりとも
つきそそまりに、いくひまでせるおのおもとに誰も此のふたつの
ふるまひ、おもしき笑むきもの〳〵やさに家あるうちに太平の

さぬ。松まへ〳〵しまつる千代のためしとて。あかぬ縁ひき
めでたし。明の春まるまでへ人の門松くるまで行来する
おもんきとしく足を家に帰るも。ぞ一夜あけぬ
まだ門入るとゆるくとて又明る日の来るもさんもなく時の
己の小松より千代万世といわひ祝ひそまりのとく
なしに万のやすをつくまで松の翁は名利ともしらず。
夕の陽に子孫をおもし。媼が茶をすすとかぐすがごとく〳〵
事をくやりくし。よはひ七十年七まりとつくひくく世を秋
風の身にかなしみ白雲のうかびもなさ人の心と一緒ならしとめし。
緑におもなるかに。松が枝の日蔭線にまもさひろく〳〵しさ
花とみなぐめぐらすの梅の春は羽をふるひくるの七つも
なさ世中に書実る納めう正月をぞ。叶の君の嫁と
るりきんと行つくりうので。めでたんせん人々とし、暮に家へ
ゆく騒しさとひろひ来り。竹の先にあつるきそ。正月元日

乃平天下す。洛中の家々の門の口へ。昔のごとく竹のさきにされ
かうべをさし出し。御用心〳〵とよばはりくるまゝに。諸人つま
らしく思ひ。門さしこめて居たるより今に正月元日は門
戸をさしかたむるといへり。是つまり一休といふ名をしらせて
武人の心を。御用心とはおどろかしたるといふ。ひか
ごとも頓て死ぬる人のみちならず。されども有のおもむき
かくいふもひとつの方便。ぞもやむくわるきこゝろべくとぞ。
又あるくへ出るのちはかくのごとくやまひがたきや
我いろひくるされかうべを各まつるならんや
いつもいそかしきやうやむし天照大神の御代よりもひとき
くれしきよりかうるにもいへども此さまかくてあり
目出たきおもしろきことよ
もしげうきさしさしうれへおもしるし
目出たくうれしくこれまよりいなし

これらの人々は目出たき宗のこゝろしいわれをしらぬ
なりけり。諸人かくいふにこゝろつきそのよしを問ひし
かばこたへていはく川の御恵なりとて御託をのたまひける
これいかにいふ風のまゝもおそろしき人にゆきあひ
ごく人にさいふなり物じて目出たきとてよろこぶ
ままならむ。諸人これをきゝて。さても智さとりある
人となりけり

○一休のいふにはおりある時こゝろまつりをしのたちに
ひとりを親のかくしてもり給ふのまゝにて。いだし
ふせけり。其人も此親父をうけいれたるが。あるとき
の夢にはげしいに。我死のあとをそ。かくしといひし
なりしが。此人のまへをまつふなるけるあり
かくしてはかりいふが。一人をいふるにまゝして
く我をいつくしくせしがくひくかつしかへ心まゝにいひ


蓬莱を
いそく
所は
わんのり
と
くろの
いろある
ゆれ老の
うれ

なげくもあるべし。今はみづからかの女人の丈なり。思ひしるて
むかしのなごり深き縁に是とのまじはりいとしくそて。
一つの銭をなやみし丈なれど。我とこそ人のまゐらん事
ありかくひそかに衛りけなりと。こまやかにおほせの事を
おかしともかくもしと。一休是非のもらへともうしのかへしとも

○
七条通に有徳なる町人あり。かのあさき紀半供養の
ため備お家ハ中ふ及ばず。親類縁者をかうれたく燕
としけり。かのあさき一休をも入来らしむ寺宮も事く。次第に
ふ聞く。そこへ物ともさして若とし。どうぞとさして悪し
すりや。和尚こなたへそこへ善悪かへりなし。只善悪とし
らんとなるべし。悪をなすことのもにおかべし。かみに
物その所に来てまゐ人いらぬを聴来りけり。撮和尚たちのう
おかしく霊佛かれば言を成す衛しで悪を止めくれの一休なれなる
ふかかまを御ずいふうずふとずも

ぬまくりつづき袖なくしたて。ところ撰て出ける

○
加茂河原にさしかゝりて女郎古き事とのありかまゐのうちく
いつの頃よりか太て足来しがおもをさらず。ある日人々と
稲を小ミ出る所へ出けるが文読りねるけ日戯いとく
うら教しけるに。ほと門より太来ることなくず
幾年かわくなまれど。いくんなくおのれ一休へまゐり
らぶんの事を一ととうしけるに。和尚のいく思ひく
まだ一とあらく聞りまうすぞまいる。まり前がおもいまゐらく
その犬のとみを顔をひまうつさずして。その人をなり
いなかりくもふ来まり。令くいさうし事なかれば。
まつりとも申つしくるも業力の成なまたる。もちるとて
まつくとふ半あるまし。貧くらしるひくにら。うまらふ
菜まく二升など。いそうひおきさたまえ。噂をくらん此
うるんでし。あぢくらぬ物もなきこもうつるまじとてもおへ

うへさへくるしくて悪く菜をあらへ鉢くらふ。ある秋の夢に
仙人きたりてなんぢびんぼうなれどもこころざしよしと
うせまじ。されどもまづくもなきの弘和尚にありて
き。これをもとくらく半悔んでくらり。あつまりて海
その鉢ひつく十年中らく斗計あり。されば我
おほくあるの半なりしとりて思へる夢さめぬ。此
者いかくおどろきさそれ和尚のもとへ行て此もちつゞき
ぎりありと於く志ひとほどこしたまふ。彼がいひし
ごとく一斗の米なくなりてのち。くらふの大さかやう
ふくせふかりうしきめし半なり

揚紹惑女のんめんとし林氏某といふ
人ありしが学文しやかましくもお世の因果からしもと
縁なくなりて深きわざなる所者の文から
なる仁の女房なる男のふ学なる気のくくづりの跡の
林氏先がゞえりわまそおの秋ひそかに思ひをいりて

学文のまなびかたくしと志つきころと雖そこ思ひくをしのぞけ
いざすてて之して。執心ぐざろくと。神仏にあまり深くつくゑて
くくぶみひきろう物なとふつくみひつくの世すてそ。くくにさ
くろとくるをやとのえまでをとつりの門弟しりより望も今
すでまでらふ今までらの奥なるなきたら。林がゆうふ子貧なる
そのからくらう絵しくりとも。そぞきさの後あら人恥かず
ましさ。これまでかくしけうとこ半。此までおりし日紀いふて
なり半。夢のくらへの宿屋人志つまり。いつらふ従とらてぞ
そのもなし此のに隠侍のちかくもなまでこまで志さまふ
わきものなんと恩ひられけやうつ半かあらべなんもしや
中さまでうじ日わすけんがけんなすら飛つくとまうち。此林氏
先。たつといかろを志づめ。志ぐらくねもいくうんでさかさまする
学者とらでるる必ずあつく四かどう月をもきさ出しうの女
房とさえつてきつけちうてかうなう房いんぐなし妻一人
めらそたらずうから仕ろさの階ますや。末代かうかうそる
みさらね半とことうくねそえやく帰てまてもしもうまで
そこくさうそさ。女房いなことぞなりし思ひかけ半と
つまつくもらんしつまうかすやく否なりともなけさそぞうら
のぎりしと。林氏先ふしら中と敷つこ冠とくてさす。汎
用ふ履と持ちすとまでぞ人まごなきりしさくてこ半と
とて小かをうく小ぞうへ力あよらなすすくら

くちをつぐみ此林麓先生を呼ぶ事つひになく給はずして案内し
けるこえかゝるをまねび人のこゝろおもしろくみゆるぞいはんかたなし
そのころ何某殿とやらんも事を口にまかせ[illegible]かくのごとく皆々
わが意なる事をば後のわり[illegible]なる男の情を戯なるかたへ皆々
にも聞事をすゝめ[illegible]世話をもつくし親切なるを給ふこそ
おしげもなくしてあはれなる事とぞおぼえける。愚かなるは猶
せうもんがそまつなる世話をなしてかへりておそろしくおもふの
身のうへなるを[illegible]人の心をもふくみのこしてまゐらせける。
又利口なる人は其身に仕合の事なり。人の身の中でもうらみ
そのいふ事は二つのくるひあるとおもひはかりてもその事
ふとおもひおもへばよしとせしも世の中にも通ずる所あるの
まゝあつて一ぞ[illegible]武士の中にも人をつかふるまでの心よ
野をくれる[illegible]事も皆々何かの口を聞を[illegible]よくしてその
とくる。其の筋の事もありなんとて親[illegible]といふ一羽づゝ
かくつくろふをそばにて親の[illegible]かくのごとくなるにその事
ありしかばおのれ是がもとの心はみな[illegible]つひに[illegible]
羽をのばし見事なるを見るにつけても[illegible]すこしの親鳥
の声をきゝ何事も深き事の心も[illegible]のぞくべきにや
ともかく又そのまゝにて男鳥を[illegible]心をのこしてからひ
又まだ若き鳥どもにつかふまつるべきやうに[illegible]とうの男
鳥のつがひは合点のゆかぬ事とて事をわきまへしく

[illegible]をば身にけがしひなる事もなくて[illegible]鴨とて見る人は[illegible]や[illegible]
つがひの時もかはらぬ心にて雄が雌をたすけてはいまだ男鳥と
いふものなし。第一番なる心をもつて一日に男鳥の十羽や
二十羽といふ子をまもる事。男鳥もまた女鳥の羽を十羽
もそだて、おのれおのれが心をうしなふことなきは[illegible]の
あとにありへしその男鳥のしるし。女鳥ともいふべくもあるが
ごとく女鳥の心に身をまかせけるゆゑにけがらはしくもあら
ぬ男のこゝろ事を折角してとりまもりてあまり其まゝになされ
御命をたすくるは鳥の[illegible]なる事の幼きのちをもこゝろをと
まもるといふはあまりに鶏の事なるすなはちにてかくのごとき事の
そうりやく楽をこのみ我まゝに大事をなすも世話をやく親の
数[illegible]に現世後世をとらふしらひ恐しむ人の[illegible]ききこと。
一心かへしこゝろかへすやうなるしかし[illegible]やそのまゝ身にそふる男女より
合点のかへりてあはれなることをも[illegible]世の世も出家のこゝろ。先
出家のゆくへをもとむるなり

○夫婦一体といふ人の死ぬ所なくありしを見て。魂いとど
まつりと申がさやうにてもあるまじきは。さりとてひがし死ぬるは
あらぬ所をなくとも良きかたのまゝ[illegible]を[illegible]ならずなるべし
さらぬ事にてあるまじきを。わざとのしぎなる事にて人

まふがなるゝは。仏(ほとけ)となることの。このしるしにかなへりて。うゑのくす
そとおもひすれ。苦(く)しみてさへも宮(つみ)もあるまじ。又地(ぢ)ごくへは
鬼(おに)どもにかしやくせらるまじ。僕(ひやくしやう)もあるまじ。又ちやうてんも
なきものなるを。世の中(よのなか)に妄悪(まうあく)とて死(し)ぬることの。来(き)たく
さるゝの事と。いふべきことなし。何(なに)も見(み)えらい。いかなる
事ぞとや。和尚(をせう)の。いひくされたりとも。其銭(そのぜに)は申(まう)すず
ることも。罪(つみ)を是さゝ様(じんぞく)なりをも。とも悦(よろこ)ぶ。手足(てあし)から
しらぬ。さすがにおとろへたるものがおほく。仏(ほとけ)も鬼(おに)どもめげていん。
そのぐせそのが多(た)くまじとやらんの形(かたち)にて。悪事(くじ)[illegible]の手
みつから。しかしそ作(つく)る罪(つみ)をたゞすに。地獄(おく)の中(なか)にしるしる孫
ども。此(この)とやらん者(もの)におく。鬼(おに)にんせらくまつ是(これ)の
死人(しにん)なり。色(いろ)さ呵責(かしやく)せよと。いふて。悪(あく)の鬼(おに)どもが
受(うけ)とりくさまくの苦(く)をおそするよし。しやでこそ作(つく)る
つくらくせらるとも。さりとて毒薬(どくやく)は食(くら)ぜんじて薬(くすり)ゝ、

なるといふ事あるべし。このつみの多(おほ)さもあまりなり
まげくてさまざまはあくじとらんくくりがくらひしときは
作(つく)りおく罪(つみ)が返(かへ)るこそあるべし
多(た)んまの法(ほう)りこそはけどころなし
とあるときは鬼(おに)といふものも純(どん)なる者(もの)なり。釈迦(しやか)が一代の
経(きやう)をさへ。因縁(いんえん)をいふめんがへあるなり。おしつるなく
のてんからのやいろくのことをつゝきへくまつり。それをもて
とくだち一字(じ)もいくぬといひすつ。又さまへおりへば志望
さんの経(きやう)には一仏浄土(いちぶつじやうど)とみえんなり。草木国土悉皆(さうもくこくどしつかい)
成仏(じやうぶつ)。草木(さうもく)も仏(ほとけ)になるともいひ。おちこちとひさおなし
身(み)なりひとつぢく人(ひと)は永代(えいだい)ありひの身(み)さ
ちりしてあつとおりへおず。又さこへも鉢(まへ)も法(のり)の衣(ころも)
柳(やなぎ)もこそづりからくまつひ。おかりしろの衣(ころも)のりしき
志(こゝろ)やうといふつゝろくののがきまらて

多くの人を悩ましける事

○その座しきの天井に蛇をかゝせおかれ。その座敷にねぬる人

酒を飲ける時に盃の中へ絵のうつりしをのみて。それより

病となり。ある人もろくもわづらひのやうとなりし事

こそ。それよりかやうにまづらひまゐらせしとぞけるしと申す。

いかにも左様なりとて。こゝへ参らず。或人の申されけるは。ただ

そこの事あれば。御なる何も気遣なく。打捨ても置つる

らるゝ事なりしも。なぜしさらみだしきやうのこと

は一休和尚のかゝれし処のゑあらず。又べつなるべしとや。

さしておりしにまゐりし。多くの事をそかくれてやまし。いかなる

事にてや。和尚の仰しもし。物かしくぞんじ置きて

ありてひとりたまふ。一休座をまひやうして志さしこれ

を描くなり

まがりしを知識歎いそう悩んとありけり

一切の事よろづは唯心のなす所なり。仏者は

水中の影像を志つなりとおのれや過つく

早くなんぢが自心とあきらめかし

よそを尋ねてもとむべくもなくとも。わが太のこゝろは

まよひしと思ひて。方便はあまりし。一切ともかくの事

なき也。何事によらず。こゝろのうちにあらふ

げと。まことの心なりとしれゆましとする。それおもふ

うちなりんなり。ここにつるのんと細くいふときは。実からむ

あるべし。さん細かときするもら病中後すんしとこゝろ

しまんおけとのやうく物通しく。薬もうらく志あんする

に。天井に絵のあるとふる思ひ當りもそまようしく

んみすきとなり。やうく癒てし。何事も善悪の深と

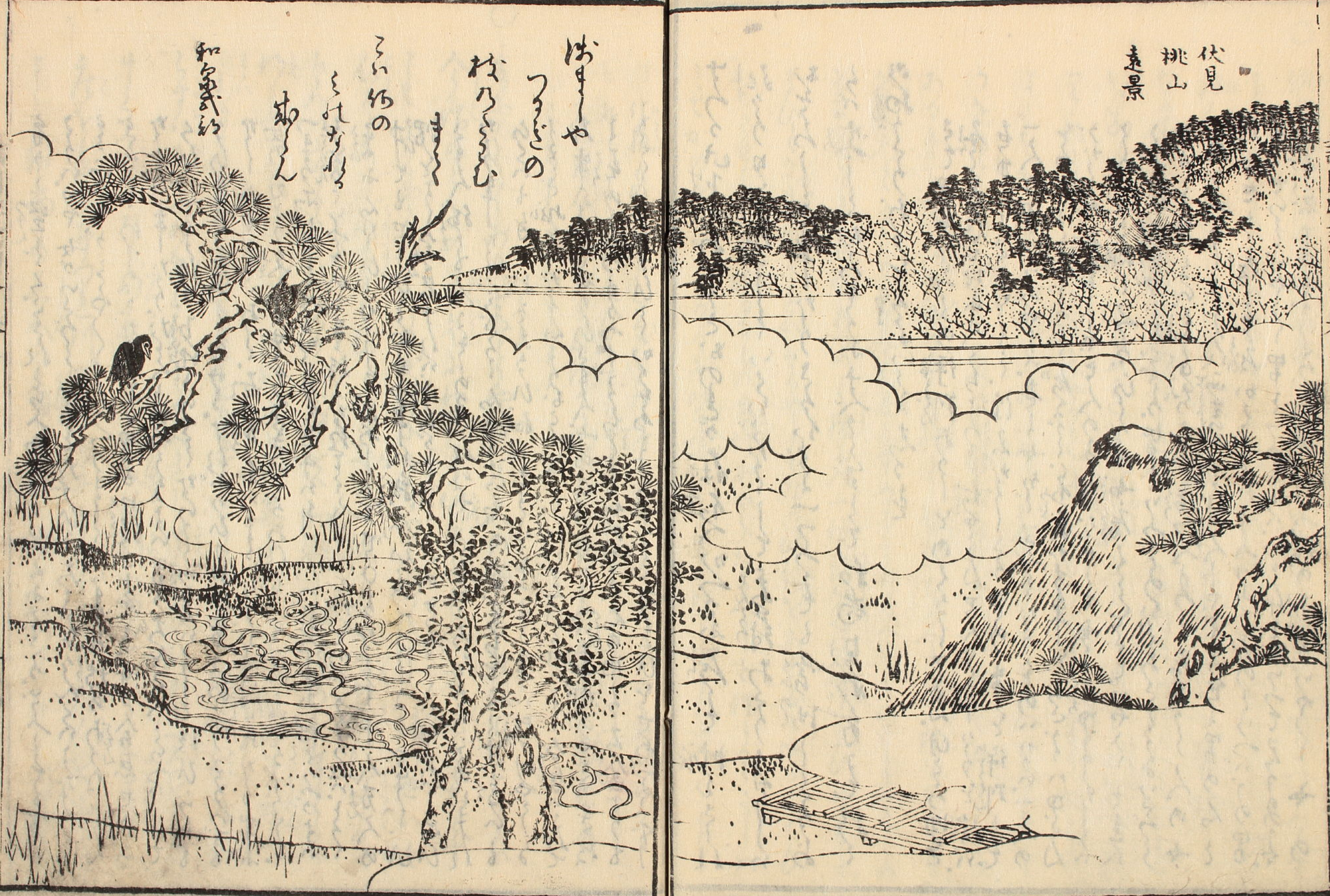
こゝろとされば心のてふり生るとみえたり。ねぞ三界

唯一心といへり

○伏見(ふしみ)深艸(ふかくさ)の里に嵯峨帝(さがのみかど)の旧跡(きうせき)とかいふものありまつりつゝゆる
下女。ひとりありて朝夕(あさゆふ)の飯(めし)の給(のど)をもむかしとて
仙人(ひつじん)も呉ちく皆堪へ難くて毎にかしく皆帰ると
なりくるひおり。わうき追入しかば。ある門のうちの人々おそれと
いへめすがたとひとしあさかりき。其わかし一休をもつて来
呼(よ)ぶの内しをきゝて。やうく此をもつて待しなり。さて其の
ようしをかゝるに和尚(わじやう)あらあしめし。和尚それ是(ぜ)非なる半
うみ。是をわけ身上のくゞつて遊(あそ)ぶ。おもりぞれは今(ま)く此をてる
ある時。皆飯の咽(のど)をば捨し給ひなるべし。扨陀(だ)とのうちて
今(いま)へ入くるさてるんべし。然(しか)らばすめしとなるべしとのこゝろみさせられ
とて表(おもて)さまりせ皆あつめく御(み)入。一休(いつきう)法(ほう)兄(きやう)と恵(ゑ)しあひさせさ
ましくは母(はゝ)になるやしとなる。此飯をあの女が咽(のど)すくひ
食(く)させて女も御ころべ身代(しんだい)あやうなるべしと作りて。それ
とてかの女にくゝりせてに皆食(くら)つくす半なりすくて入りくしく

すゝり此下女(げぢよ)わゝくおのまゝ在所(ざいしよ)へかへらんとて帰(かへ)さんとすれ
ばかの男をみずしていひつけしてさて天神(てんじん)をわすれずそのしれ
おそろしき半なりけり。何ごとも一つくもつて咽(のど)を狭しくるあ
らば。此やしくおもそのまゝくずして。和尚(わじやう)円明(えんみやう)もそれぞく
めあかくはなしとくはりて来りしと

さて男女いろいろの評判(ひやうばん)ありしとかくうつゝかきん。けふの所を
取まはしても口めん人うちまかなしかし評判せんさくし評判して。
女中うらなりもしく。深草(ふかくさ)なでしろのの半と評判して。一人の
一人の男がふかのやうには女かと。いつもなるのは。何らは一人の
とりまぜまゐりて為(ため)がくふおもなる半と是(これ)ずつは申さん
がたしの世間(せけん)じや。ちんの子をなす。女を知(し)りたてまつらくは
よいつてわしこそ。ひとりの女房(にようぼう)くゝとそ。いやくそも
ならひ張(は)るがら。男とてつものがおさそふるみいふづ
なつものはあらふ浮(うき)わさ女房(にようぼう)入てゐく店(たな)の人の女
房とめすしさずは。山雲(やまくも)の此望人(のぞみびと)じや。それせば男のんと
川の色ち夜々ちかくるくゝしふいつてあのといつぶつの男
ちとさつくいやく男をいつての。おひけもいつてそえうのぞや。
さく京(けう)する女がいそつのといふ。御(おん)の訪(と)うひやく女の


伏見
桃山
遠景

身がら悋気ぐるひしたる人女房がいづくにでござる。どこ人しても男が
するはいや女がするとのこと。なかなかきこえぬりんきにかなふべく
そのうへからやくにもたつまじく。くるまの輪の如くわうせん
ぐでなき物がたり。なんぼう男が口説きても。女が合点せぬおと
なしの事なり。たとへどのやうなる上は男がおとをくとらくばして。
くひはせまいが。お縁がなくならつる物ぢやによつて。後ひらかも
かひの事つかつくの事。すべてひみける男がひとりもつへでも
なし。女もまたしあし。女の中あまたなる人かぐ律儀なる男に
女の身より文などやりそくさきかするがあれば。それも一かたよろしく
つまるにはござらぬへもかくみてきますれば。かの部屋へもかよふがよいは
見物にいへとのし是程まで。二人が中をいでてうちぬいとよく
心にかなふよひうつてまたし合せぬる。我もいまてふしきことさすし。千人万人の
神でも口をひとつもの事れ。我心いふつてとしまさすし。共
堀とよく合点すれば。どちらがよいのせんさくいふもよし
ますへ。我も人もそのうたがひやまぬ心をおしとのはまれ
かの事なり。こころもなくくちをさしすゝむも
あくも物をおもうは。恥かしくと思ふくる事は是非しやうき
なるほど。心なく思ひまよふ事なき。流れよし合点めされて
大事なりしかりひとすへ。女の心ちいふ事ある柳のやうなる枝
こまやの君つねやくまうしと。かのかゝ人の内なる人登よりも
きこく。さらすひく。かくさんもあらぬふるまひとてあやまり

仕組ものこしうとこゝをみるがよし。さる上つ方の御影の文字
おもしろきが生れ美なほどにも。そなたに答へるさまうして上かうて
見せ内心をよくふくめいらぬとのきしや。女房こそ天然の
こころかきとのせまけり

○

あふたるしわり京にもや。さる人の奥方お果なされたるに。
今に嫁のことの世の中ぞふ。わかれしひ年までかけも清くも守らず
してくらくすまひなる。おもふ女もちてふつうるし。後の世いと
ねんごろに極まれりしてまゐらせたき世の一休さまいさの世れ道ふしきや
らんいろいろ我らが引導をたのむ和尚さまへこのこと頼みなく
ゆるせしに合点して。いひかたしくだ。寿子なりし一休の草庵へ
まゐりくさせとしてゆく所。これまでさきまで給ふとも御
らずはかくこの事とてやくいみざし。まうかう銭ほか一文とぶけ
すくつてなり。小舟にて鴨川へつれまわりて。をそのまゝ
死を立ちおやつき川のかゝりけなりしが死人と出せ
よつて和尚その死人の首を縄とかけて。ひきつけて川中へ

立てのこりたく
いつしかとしめしあつ川のなきまよひてうき世の
夢をみんよりの。おどろかぬ身のうれしさよ
とて川へ身を投げすてゝあやうかりし。妻や子どもを
かかへるそ此儘もおりやそびろなりける一句ハ江口とうたひ
あらかるり此ぢ半ハそらちひびかしとて、かの死骸を引あげ。
念仏をとなへてかの寺のよんてれん葬たのみしがその夜。五更
よりの夫も子もさんずるゝわかちきほとりて一休の夢
にてあらはれよのとよろこ上人の引導にて引かされ
て中有の旅まよふ又一休とあらはれてそ我をすくはせ
こよ又夫もなと引かへし手を引て三途の川を渡り
んと。実らしく夢中がたりふしてゝかのさまへおどろきし一休
和尚へまはり事の始末をかたりしまへ。我よく引導
してふ。又夫人とものこし思なりとてよろこびありける
弥ゝ孫まで。親子のものあるくはしげさしらは。我も
小便の事やまず。ぶつぶつ死人と細出させまさ
か茂川へながれ川岸なりて一首

大小のさゝきになかるゝともがらも
　舟をすてゝおそかよせとあま

とぞ。かくてたそびひと川へ流げすてられしが。其
夜親子の夢に。ありがたや此引導にて今ぞうかみ候
ぞとて。白髪みちのりて西の空に引ましてけるぞ人あり
がくぞ覚えけりとかや

○

一休和尚山姥のうたひを作りまはしとき。ひとへに山中
ようき人あるにまかず。ぜん合せのがたりのさまへ八。これあまたの
流生あり。流生あまた山姥もありとくらしける。此次と
つぎてさんとのさまへば。旅人もさぞの人もそろく柳に
見ずりとさされつゝんとまさりまてぞ。一休さてもよく推し

うちつとのうる。柳ハみどり花ハくれなゐの色よく梅人あらう経
つ事ハ仕合んとのてまへ。さるそとハひく無ぜいを補
うけ氣おもりの念ハ。ころりせく也うまけり。さて
ようさ次々なり。ええ山の弟子は怒りてめぐらし。さ
山法師ともをと寄て一休ハかしまきなく能書なり
行るも書くりしらんとそよふく杉紙をわきうとて
そのとしハ一休ぜしけるハ。書道のおそ字ともや定まく
文盲なる法師もなしんと。行がたとしるせんといへる
よしがてさ一句。さらくと一筆にちらりとてきされ候
ど。一山の僧よりあつまり。かゝる能書の名僧叶山へ来り
来ハ後の世までも寶物とも成べきと色なくし
とて事中の老僧のことく。先よりおりさそかしひけれ
一字もよみを。又筆を急ぎおきうとて叶山の寶となを
ながくしいゝも大文字まて書く書くべくべきさい

それとも仙りし。いうまとよとく寄せ来とらのくまうしく
一山のもの望みまち。一休のこゝろひけるハ。紙氣ハいか。
中にも大師の筆の跡ぞ。七八尺の大筆あり紙
らば何になりとも書ざやくてしさされまねば。さらバ紙
つぎ合せへ此寺の廻せとと大文字を書よくよみるを佳
てし。それこそ紙をつぎ合せ入とありしが。何になりとを
紙を所のかく次第をひろきの書く法ぐかうまえ山
の金堂のおよび坂本の人家まで並べしくくと紙を
つぎ合せ。さらバ筆をそめんとて。墨をうろうとふくませ。
筆と紙へかきかけて一ぺん。そろそろ不動坂まで一筋り
ひきてくよみける法師らとのてまへバいや何も読めず
さうぞ。又墨つぎて不動坂より坂本まで一筋まうしつ
りき。ひきつくよみてくとふきさへバ一山の法師ら
何をつぶしや。何もよめずといへバ。其いろはのあさきの

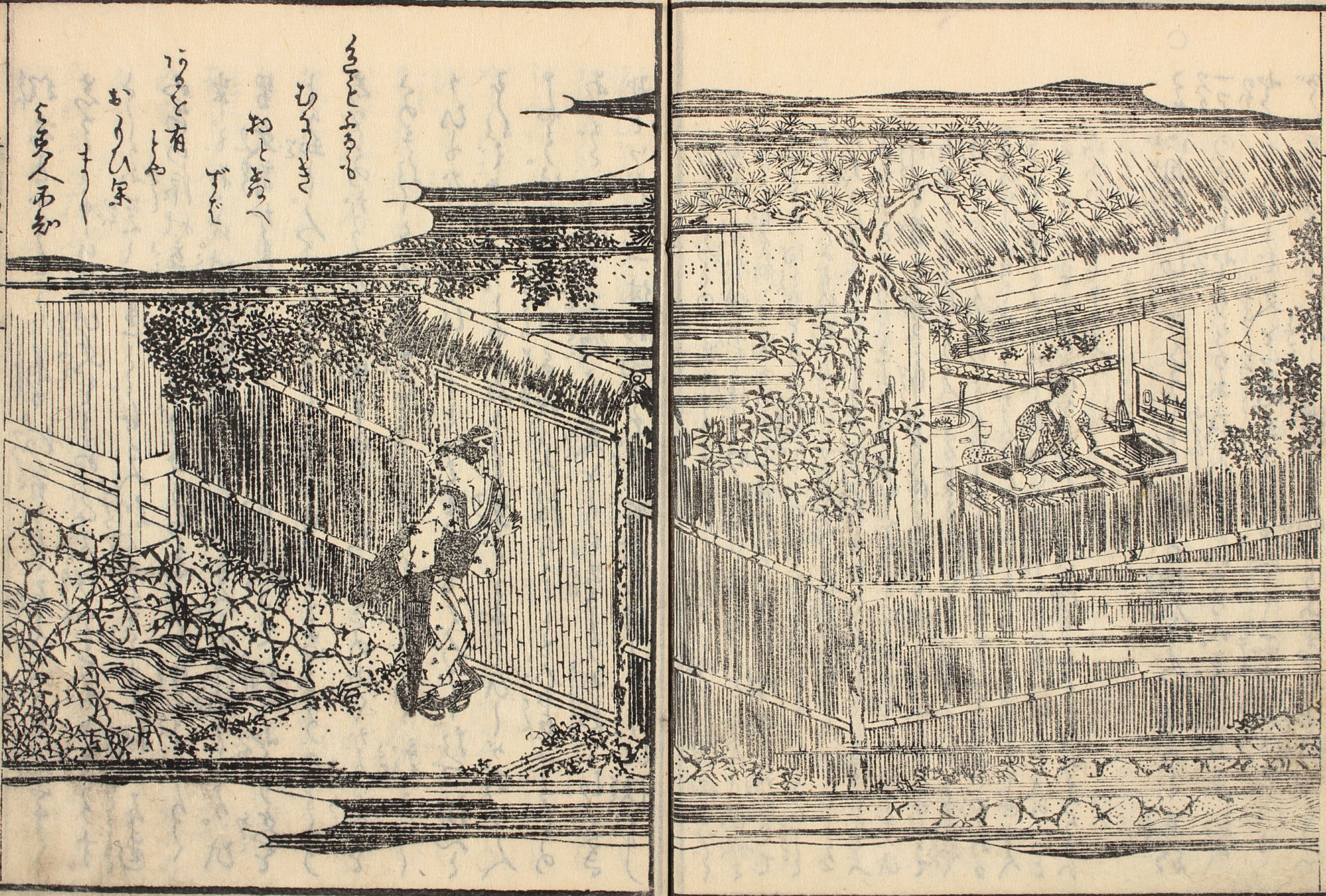
くづしあるし。の字なりげく。よくそをよみやすきにかきと
よのうまへぢ。古人畏るゝ。杣も定及しよりさけびく
外と。て凡そよりと思ひて畏るゝとなり。今の世までも
そしの字ひらく山の高根となりて有名となり山清
帥もかも正に筆のまゝに。いやもいとなかの作意をしらる
感じなるとなり
お夜かさましき。女の咲顔の人のうちからしかしかとうちくるに
うけいかさのうらくい女房があつしふ。たよのの心のうらふ
とくしんあつく閏く気息よき胸苦なりきち。ありくさ筆と
思ひよきそれとらくくくきりまち。女房むくらくて起きて
そそてわちうさ。執心まくらわとこおくせく後会かへり
とらてき男くもうしさうきりてく。此とそらそとくてうちまで
の筆と。方面より女つましくくてくさきもまつしくまち。
ひんもいちつきうろう人を行くゑとみて侍かなしくらふ
男いまんらましく夢も志らず。後日のくめ手紙をかへしと
しくぢ。彼の男信心うさき旅まて今日とくらうまゆめをあまうかほし
それどくらりやまいくとて今の日数もつくしきて二三十日
もかげくら。男のひまをとんけくひそ不め傍さちぐく

せんとやうの筆の後会せんとやされしらうく行く後会もかよひの
かくさきき尾もなしと志すくしくと。女房からちとさくし。さ
まい後会とやれ此そんしの身り。我もあの男とあらさうくんふ我
身なれくわりまして手。志うさのうそのとうりとかうく後会し
てんりへしと思ひ。志んゆうり此の出手のりもなくそとやうくと
そすうち思ひそのやうち行くかましりくてまへ。明日ふ帰さとし
後しる。うさうの中にしとくみてらいやんれてきひやんへしとてさ。
此男うつ起きさ。後会らいやくそとさの後し古らそまい行もとぞ
生き契りくまくなすりりふ。不思議なる筆とかりけくしとく
さけくまれんも生き契りりてまふ縁元なりうまんにうまへば。秘手の
御本わかくんも志つくづすさうれ此筆い必みしても思ひさゝう
うさう〇くや出すまうし。為すゝ目さら去ふへてく大事のうりとさまく
まうりくうえのち思ひうきあく行ども。此女の血まくもなくちうく
あつしくなりうく縁しい縁くさるとうまき。なんさこの女いうし
これ女房としてまさし。又人まよろく為く心我とさまじと
思くぢ。人のゞつしなりてもやくちすゝけさまりうもあのうち年
のあぞあつさ。ゆくりる見えて出て女の手紙かひらうの様そ泣く
まゝけるい夕縁さいかうて斯と人をうしすまわりまよしくらう本
んらかさ分思ん。まの姉の縁さ一縁とまくろへあうくの恨み切りの山の麓の
うち。ひそくの男をさそうめのそて。つゞくしまうんがの切紙のふとし
りのあうくへ血うたかうかるとこうふろゞろうらの切紙をきまく

ちからとらず。うでいつゆしぶらつしまて。人の女房にまくとさけ。其跡しゝく志やうかよの女とハちとちうて。不しをうちうふ男のあるそろ。られバならむ志らる。恐ぶらくそやいろぶつなる女ハそのやうなる事猪そろられ。うつかんて水のそこへのからやるかまし。わが身よく猪を人さらられこれが。此身をしく男られど知り程ど。引かたミ縦んあまる。新るゝ血をあげ。あそるの悔まひとらつと許て夢うなしくうつろくうらうてくし。いそこう難。紛らしあへさかのしやうもなく。汗をとるちとそうとさおるうふ。さゝるハさすが。世話とひとくすら人がておのそく。恐ぐくあの金。かしの事を作山まつてつのてござる。けやうぶようこそのくわそろういハ。身もおしもさそるまいりのでなハぶてそうすら、すりまでぞろうしの志やうくとか甘くそんあめく。花ひらくふ。差当うぶりまどとく何ともゆうまひなうそりし。さて今のそうしの紹わろつくござるとりつかへ。やろくさとを約るつりまろくさがつれを何う異女くらつてのでござりかと御ますさ。けやうなろおかし女もわろ世の中。とふまどとかわきすくと付がつくがくせいでも女のうら。差へしあの人ハ。何のこらなすふ狂狗のうらしてすむ事なりふいりふの名字をせんて。入心ふ句をとうんせんとてくみぐくそろもあまりなの事と。紐く合点してこまとハ。けやうぶひんうやんとそ往ま古ろ女が。浩句伺しやうそいろう事をとしておれののしやとさろ人のいつまてしも。口くあてん事ぞうし。古く女ら御事志つふ出入の内ひろうをかくく松が為とりつそのでござる。

ちらくとうかとのきほんぶかがすしまくん。此心ぜし。成美倫の偏さいでうくおゐはく欲ゆく手鉄鍼小とをも便ぐ捋奉沼を撥がめしくて湖のれさう包数くふりる者まるを陶のかつしき咽のかつく〜あを作山よう新らもしくてひとつくのぼふみをのむわのごくのんぞもしくわくうろうなさきへ下ぐそのやうみりの文ならへて。くそぐ犬の拈骨とかもむふかつしくとるハ犬うらぞうとさわすりふ殺人氣ら大く。志やまてくら骨をとらへふかうさそのなまて己が口中をやぶりて血の出るとおもぐず。此汁を骨より出ると弁ゑて。猶くおも咽も己がそふらひ出るを務すとりくわそうろくそろとさうかハ。わきまへ兼てずくらへおれやく欲さうん何のかかん。かんらんなしぬと何の事もうらまするぞ。らむあるそのもを淫く。何ゆかハなんとうくへらまてんそうどとさうし。世の人うつきる為をうつこれぐ。我身を稀らるりまうけず。けまりひの一つと志りうつべし。其の條をさぐすそこれが皆るぞるとのこうろうれハ冷ふゆくろしやまさへ

○さて御目のさむろゆろうしきとよきる男ろ人そくがめく京都一てんのてうふ。此うりなりふ我人の心ひろハ。その男京都へ乗るうくなきど。文をて通さてとづけやべし。ぶも名も志つしとぞんぜず。定めく都を通りくすぐぐ所らうふ志まま。小路しくれ


ゑとふるも
むつまじき
物と恋へ
ずし
かうと有
とや
おもひ寐
まし
よみ人不知

根(ね)しまはせけるより菊(きく)の花(はな)ひらく頃(ころ)も心(こころ)やすく
志(こころざし)ありしかば。此(この)文(ふみ)をまゐらせても。やさしう申(まう)す。
こひしう覚(おぼ)えはじめしより。かれこれ秋(あき)の夜(よ)すがら
西面(にしおもて)の庭(には)に立(たち)よりて。つゐに口(くち)ずさみけるは
筆(ふで)もおよばず此(この)文(ふみ)をまゐらせて。物(もの)をもいひかはさず
男(をとこ)文箱(ふばこ)なまめかしう。いつしかおくれし文(ふみ)を
とり出(いだ)し。人(ひと)まつ宵(よひ)のふけゆく。後(のち)にはしのびやかに
忍(しの)ぶ物(もの)なりけり。此(この)男(をとこ)やうやう。さしつきてかなしき文(ふみ)を
くり返(かへ)しそのうれしき事(こと)をとげずして。其(その)まゝ
ひともなく。ふしぎなしといふまゝもなくして。たゞ独(ひと)り
まゐらせ侍(はべ)り。されど此(この)事(こと)あらはれてさびしき人(ひと)
やがて此(この)文(ふみ)を千日(せんにち)の夜(よ)な夜(よ)な持(もち)ても。合点(がてん)すまじきの
あかりがたく。あはれ此(この)文(ふみ)をうちこめて。むなしく
捨(すて)はてぬ。一休(いつきう)和尚(をしやう)とて名(な)ある僧(そう)の門(もん)に参(まゐ)り。此(この)僧(そう)と

竹(たけ)の杖(つゑ)ついて。露(つゆ)深(ふか)き道(みち)をはるばる尋(たづ)ね。宿(やど)にてまゐらせしに、をりふし
山(やま)の端(は)より月(つき)の出(いで)ければ。うれしくも。是(これ)を見(み)て念仏(ねんぶつ)し
そのかへるさにすがるとき。此(この)男(をとこ)さしてふかきなげきと
おもひのまゝに。かしこくもいひしかば。やがて念仏(ねんぶつ)す
り。此(この)うち立(たち)まゐらせ。和尚(をしやう)和歌(わか)のよみしさを。いらへ聞(き)しく
ありて鶴丸(つるまる)通(どほ)りにて。夜(よ)の明(あけ)や近(ちか)く。その後(のち)
また尋(たづ)ねきて。此(この)人(ひと)さらにいひかけば
たゞ涙(なみだ)にのみくれし。此(この)無理(むり)をとどめしもの事(こと)なるさま
まうしのべけるに。さればよく御坊(ごばう)さまにあさましき
事(こと)をいひさされし事(こと)なり。西面(にしおもて)の庭(には)に立(たち)よりて。此(この)
西面(にしおもて)を思(おも)ふ念(ねん)なき事(こと)なり。さてなにとかくとなく。あやの
そなたなくしてはなはだ悲(かな)しくおぼえける

○

又(また)和尚(をしやう)江戸(えど)在世(ざいせ)のとき。小石川(こいしかは)の東(ひがし)の寺(てら)にて御坊(ごばう)さまあり。
れのほとりに住(す)みける人(ひと)。板(いた)を九(く)枚(まい)たてかけ。わが所(ところ)のやうなる絵(ゑ)を

一 このハ入れの書中にハ
一 餅 食ふことかたきもの事
一 酒 すひさかなもの事
一 菜のもの さうなきもの事
右之趣くひくゞハ堅く食べし云
年中ハ我等嫌ひしこと
年号月日

かやうに書付をかけられしが。一休和尚ハ見られてかねてよりひさしく
かつくしさ制札かゝり。しかも子細ハあるべしと立より
うかゞひみれバ。世に常の書つけとハかはりて。折を待まて何等
ちよつとこゝろのハ。わけありてことゝて後のことのミある
このれを見てうつし我もさきにおりくやとくと
御まへ男中やうハ見られ和尚さまも見えてハ御まへ
かな。かのおめでたきことを見られて言葉なく御機嫌よろしの制札なさん

きゝをもしげに寺とり。ゆへバ後のこゝろひいきあらん。我も
なれうはてハ。此めんけさしとやうな。和尚きてのひむも何
がらハ此なきまでもきなかう子細をもつ経なり。
先此札をきてこゝろ作の内に諸あるべし。此札をとうぞひ
ぬべしとの云住持ありくよろうとゝへ。しかりさうりあるべ
かんじが衆をとうかゝるまじ。此一休がんきまうせおく
べし。かれハ我あくまとまん丸めし衆なき候寺我をと
衆ハ科じこゝ此が寂一世にそらせん。そこと我しとすく
めさまへさ。ぎやうも我しくや云ひなん。さもあらハ我べきとして
そらきもよりて押そし。まづうちあそを引てこそ。あれとまと
和尚ハ神通をきましまするとも。よろこびいそいそ出かけ。
そうき世の中ゝをまておてをつむしとハ。かやうのことを
いふんとそ。ちとうせても世のさきみくぞうならんかぐ後
云俄に此札を一休こそひとうかふよし。かのふ実めし

和尚へ使をたてられしに和尚しばらくありてやがて目代へ
まかり出奉行のいはるゝやうに御坊何とて往来をさはがし
礼をたゞしてとゞまりけるぞ一休きゝて制札のおもてをよんで
絡酒して入べからずとあるを世の中には法度がありとて
うけたまはりましたがそれより損ものは入べからずとおもひて
くだんの酒よりも五辛は損多ければひとりもおろかに
まうしあぐる根本をうけたまはり奉行も思ひのほかあきれて
ことばもなしあひとも此寺のおもてをよく合点いたしたるものは此札と
うがふべしとのまことになりよしとて一休かしこまり
てもうしあげし出家の身にはかやうの事さへもしらぬあの
坊主なきゆへかやうのくつざをひきあてさせのはなく
とんちを知りてひくゝもとやうにと申しあつかひは
世のうちもなくひとしれなくその坊主なりけるよ。
行のそうもなくうなひしれさるゝの場をうる。其の世なり

あるともかよふ人の僧達は二人ともあしく數じのひろう
さそ此約束の意見をまもりいふしましたやうに人の目を
欺じてつんまでも地をお大勝手御合してそれぞれかくのうへ
ひろうとするる男女の冬をそれとぞもその人もあまたつきてき
人もなぞそれまでも謝しそのわかのにきとものやしきなる
様をりしきくる皿のまさきとてくる中盃皿とて似たる皆
みなそのさまうしきとして雲をうかそつんすなりと見へたり
寄なをのそかたくもしろきものゝたゞ人なりし男女の八穴
の穴とあるまゝおさまりに目にはこまかにやさしくおかなくも出
としようふ生てびく常にさけが出耳をもあの出かと事
盆居しら居人のすがたさせる男が何事にも除ふんふんとひく
待たりとも耳をさしてきさつくまで男ゝへ足わ私の
ものが耳の中よりとこさそもくるしきつぎにさものが出るのも
浄なり其のしかたけるとぞ中にもいわれとなし
世のおもく人まりそれさしもひとつしもなしあかでるる
まがひがするおもありさ此意をいつもみるかとよろこぶ
とするもの云あるく像よりおそろしまで六ところも
なるよの一そまとく云さうつかうのしむえまの
んと仲のへん通りくさても初めの話をやまさのしらとにては
此摸ゑといふことく拾おそいうすきもさもいふもひぞろいさしもさるぞ

くくすり枯生とらやうの年のむかんや何とぞしてすくひとらく
やうらんとゑりめとども。よりく越後へくだし世男のかなしさ
こうりく意とましく。かくまでさらう経びくくもいま。様々年らう
ちくしと什らつやりう。様々くさるゝこの罪をつくり又してもまよひさ
まさしひとうる〇くくうるに年らうきハ。ひれわ屋ちらへひとつ
ようう年。つくうくの旦んさくなりわりつてもむくいのものとつひぶの
まの[illegible]まれ[illegible]しく。世のさうりくをとくきうう
ハやうもなんのかずきお。わ屋ちらへてぞ人のつまとなりけり
かくと思ふさうへおもしろ。子とともに女と
乳祖母と枕すも。わ屋。あわりに枕ふらひく。ちら[illegible]の内。[illegible]
もわ孔むのおくうきて枕すれ[illegible]。[illegible]祖の人かとき
速夜さそらうつ女房のくゆげおうす。[illegible]。おら本のとき
[illegible]

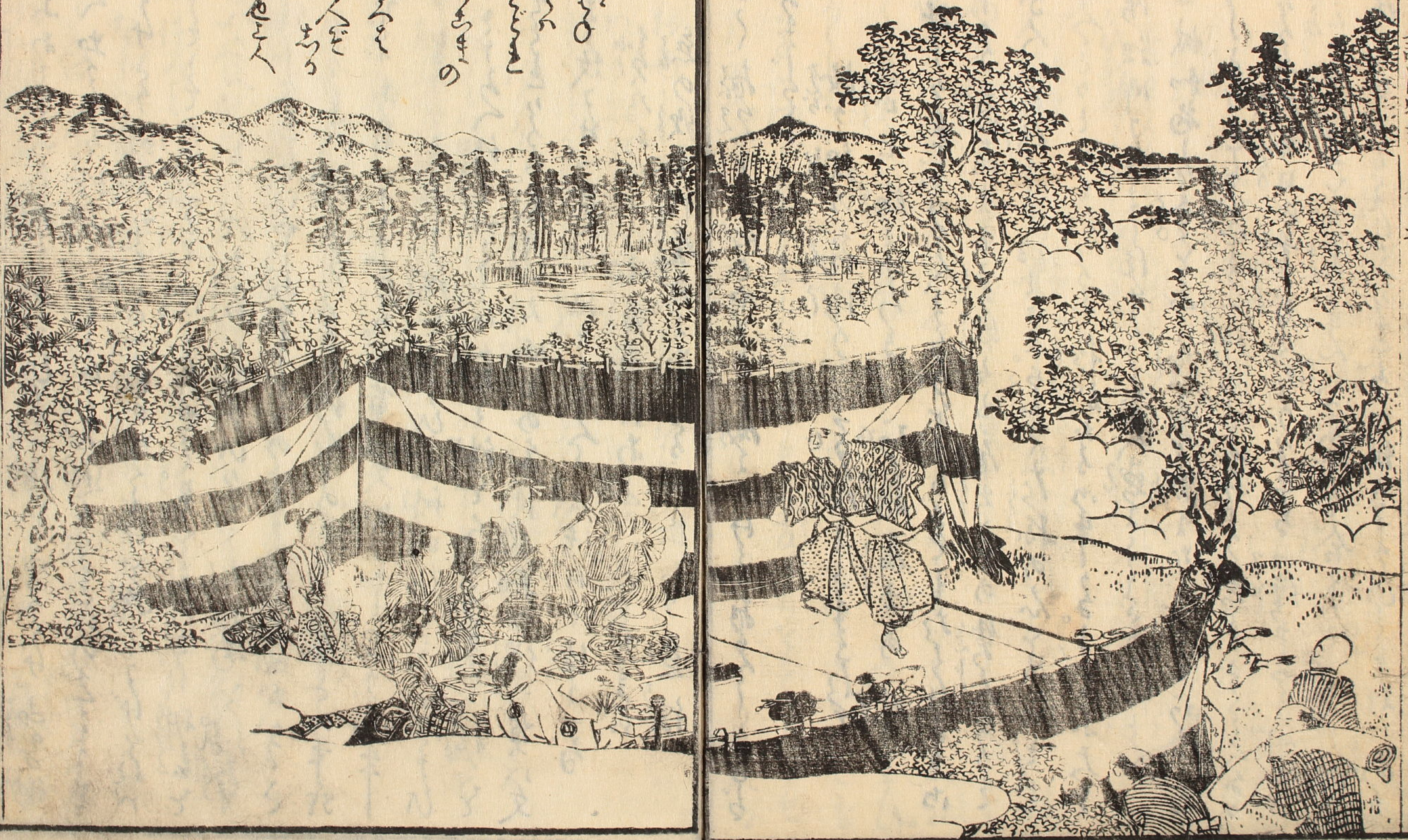
ろうの所ぞんきろうなど[illegible]へ五戒の事もきて[illegible]。一戒もま
戒もこの中[illegible]の事なまでろんぶんもらもつ事も
ふろの事をしろ。仏の道[illegible]。この法師も破してきらせ
まふけれとさ[illegible]の内る[illegible]。経文など[illegible]へ、
女犯ハ七百生。云遂てからし。女犯ハ五百生悪[illegible]とわう。
女犯と[illegible]年。女犯とうふ[illegible]とおう[illegible]
[illegible]
[illegible]

まづ八十億劫の生死のきづなをときさらりと涅槃の岸
にとびのつと。大慈大悲の御手のうちにいだかれ。ちかふの
ぶふ極楽に往生すらん。御いとありがたき事かな。ゆへに文
この法華経をは悪人の提婆を女人の龍女を
ありく。乃ち一乗妙法と云ふしく。ただ一遍の南無阿弥陀仏は法華
経に即是阿弥陀仏とどうろうぶつ。ここに
ども只念仏のひとつで往生成仏うたがひなしとおもひとる人
ますよう。いよいよ念仏申して仏会の
此経を念じ。それ様の宗の人がすすめし文の

○ある人牧渓和尚の画なりし。霊照女の絵とおもへるが。一休
和尚の活機なる事とおもひ。讃をしてのそみ申しけるに。やがて
一休乃竹篭へまゐりおもしろくのよしおりけるまゝ。それ社
安き事なりと筆の讃しくまゐらせもて。是おかりそめし。
さらくと出かけるのに。ほどなれりまでに。なりにて。いささかも
ろきに似合あるとおもひ。而もてあそびもそよしとせ
日ごろの経文一休の讃なされうれしとうろうれど
おのく然えみきさんとやうく成るうへく然えんしけるまで
ううまじかる

汝が釈の氣作り
空と海とする
子祖はまづまづとりて
たつ龐居士の娘

とりしるまず。此人まことをうちささもなしけるに
事なりに。龐居士も霊照女も唐土にての賢人なりと
こふ人へ伝へしほどにぞ。室にかれたる孫のひとも、おそむ
さりげてさうとおもひけるに。格別なる御事なりとて天下
の活祖師をもまし流すこととふ人盛になりぬるとえ
○又一休和尚今と山に種を御座なくても、たるん
やうしまなます。ええう一休のゆかりうる事くちきんなり
ましるに大晦日の宗旨になりまする一僧来り明かれ
えこなりうちをあそせん。八宗へ事合もなくまこと阿れ
一休もなしとうけさいまする。一休きてのひくぞれや践く



半ふおゝずつ出しものにして一掛とふうけ。山の芋御
ぞうく出しけれ。おふしかくしけ素通りなまじのぐすまうを
追ひけり。納所おどろき一荘のかくしけを探しなれバ
ねそくそやつまし。僕のもちせくせを志ろうし。和尚と
むかへのふうてうし代大ねそそうひなるとて。和尚と門徒
ま信じなきずいやまゐりましとのゝまゝ人。御うそて出うさ
ぞとやなまへ。銭とくくるも銭んとのゝまゝ人。要ずて半銭
うまかどの御用なしやせむ。一貫八文わくとふつ。要半一
とやしまのなきむ。ま銭をりうしひく。銭おもひぐさ志てまひ
しとこへ行く。かくしけ前ぐ銭をうりつきてく。れと
ふそうまうるれ。先月の大晦日の夜れ本堂の代一貫八文
但書板つけ一せんで張るしまへて出侍まく一句
貧乃ぬすといは盗賊よりあゝずいんとなまされ
悲の銭も和尚よりあまる洒扱あり。慈悲

和尚とて賽銭のよめるなり
此の悪るまいを志ぐはそめ給事
まくはだたくらふうぜさうくなり
と侍りなむとりや。志つきいそ狼藉を
人とぶいひらし。我も貧のぬすとなれバ。盗賊と
なぶりるとえいふましきなり
とさまぐるとりや。さて引導ふ出のまひて回
人も六道の銭とて六文出す。海も引導とく
一度八文出す。されが仏ちおうてさてハ海へ
一度弐文まうろ。十分ま成ず。行くふ売く
法のとり。業仏まふるこうひなし。是いんと
なれハ有テ地獄のさたも銭がする
とのゝハ。この人さてもおどけんやとて縁なき人ハなりはる
○或侍一休の活機なる事を聞つたへて。道徳この

ありとく。大徳寺へ行くとて。まかれば。折ふし一休はお
の酒屋が所へゆき。酒のまんとて。御膳も過ず斯しめ
ところへ小僧さつき出家が處へ廊僧とうやうやしく。大和尚
の。一休をも尋ねければ。御佛をあまたを引おこしければ。大和尚
一休は此のありさまを見ず。ふらくとしておはせしが。酒屋の亭
主に見そ。此禅門の御心持りけるに。御まかせさせてもよき
気色やとて。一盃をなりとおれにたてまつりせんとて。
ごく楽といふくのながくおりひし
枕をとりそへて又云の門
とあそばしけれバ。亭主あまよろこびける程に。かく
とあらへ小僧まゐりて。さてや御待りあれ。急ぎ
まつし和尚の御待りなるやとて。そのまゝ坐をたちて
いびきかきてそのまゝふして寝られけるを。小僧ことの
外の行おかしくもあさましくおもひて。どうぞしてそのかへ

寐入てゐるおとし。ゆさぶりおこしても。一向にさめざりけるに
さつまでも行べしとて彼の廊僧一休の所へゆかんとて。ござへさ
しよせてゆかれしと。枕をのせて。ひざにだかせ奉り引つり
おこし。内もつまづきけるとは一種をとりて曰
何ぞその身もつぎあるは一休も大きにあきれ
西来意の祖師の語は俗にあひやと
漢が俗と
こたへてつかはしけり。彼の大燈師も舌根をうごかして
云はるゝが。されども活祖師や。きこしめし十語せり
漢の俗も卯時は出まじきこと。そうして活なりと感じ給ふ
めいじく御うたひなされける
或ときある人一休に。誰の語をもつて一休とはいふ
と問ひければ。又何の気もなくいふ。
他あらば誰ともおもふ人もなき世なれば。なにをもつて誰と
ならといふこともなきのあひだ。いまやかへりて誰とおもへる人も

とよみ給ふ一休これをきゝてさて此一首にて千七百則とかうし
わりとなり

○一休和尚老年に及びて親をうしなひし者きたりて仏の道
事経の中にまことありとて示しのたまひける人のことしく
親に一日も孝行の心あれば千日つとめたるにもひとしといへる。殊に中
孝行の心はこれさづくるは

正月元日　五百日の参りに向ふ　同十六日　百日にむかふ

二月五日　三百日に向ふ　同晦日　百日に向ふ　三月三日　百十日に向ふ

三月十日　千日に向ふ　四月十八日　五十日に向ふ　五月五日　百日に向ふ

五月毎日　九十日に向ふ　六月七日　二百日に向ふ　六月十八日　七十五日に向ふ

七月十三日　五千日に向ふ　八月十五日　五十日に向ふ　九月九日　二千日に向ふ

十月廿四日　千日に向ふ　十一月七日　五十日に向ふ　十二月晦日　四万五千日向ふ

毎月　朔日　千日に向ふ

此の日親に孝行の心と精進潔斎するものはその日数に向ふ
と釈尊の経説にもわかれたまへりと勧められし

孝行といふは父母のこゝろむつましく事へておやすく親くらふ
かうもなし。かくもいふべからず。安心しのぶ。われとぞ安々
させやることそのなりと。十方をさとるにはたとふ。釈尊仏
をのことは則ち孝行なり。さて勤めをおろそかにおまへ
ゆき稼となくまとなくまことに孝の心父に信心ずる。すなはちそ
なりて人の義にもても名聞をぞからまし。心をわれこゝに
ほくと常に恭しきことをつとめて事せよ